II

クラブ視察

2012年10月17日(水) 16：00～17：30

クラブ視察 ①

コルシェンブロイヒ シニア世代スポーツクラブ

－クラブ活動－ －クラブプレゼンテーション－ －理事との懇談－

歓迎の挨拶：シュルツ理事長（女性）

日本からの訪問は５回目となり、毎回楽しみにしている。この地域では19世紀中ごろより日本との交流がある。近隣のデュッセルドルフにも多くの日本企業があり、約３万人の日本人が住んでいる。今年（2012年）６月にも日本デーが開かれ70万人の観光客があり、合気道や相撲の型が披露されていた。

ドイツも日本と同様に高齢化が進んでおり、ドイツは日本に次いで世界２位の高齢化が進む国である。そのため高齢者を家から出し、生活の喜びを取り戻せる事を課題にしている。これまでにドイツのクラブが財政や企業の支援が減って苦労している話があったと思うが、このクラブ自体はそれほど苦労していない。

クラブ理事の自己紹介

ゲーインズ理事、ダリッパー理事、トクロウトウ理事（会計）、バークナー理事（心臓スポーツ担当）、ハンベルマン理事（女性で地域との関係体制を持つ方）、ノエンドル理事（技術担当）

クラブのプログラム紹介

このクラブは会員の対象を50歳以上と限定している。会員の年齢は70～80歳台も多く、最高年齢は94歳である。

月に一度、クラブハウスにて情報交換のための朝食会（information breakfast）を開催し、会員の健康や健康に関する書籍等の情報交換を行っている。毎月120名ほどの参加がある。

会員の遠足（旅行会）を１年に６回計画しており、この視察前日（10月16日）も、バス２台分、87名の参加者にて開催した。また、年２回は12日間の長期遠足（旅行会）を南北に分けて行っており、このプログラムはいつも満員になる。年金の少ない方もいるため、費用は格安の12日間で550ユーロ（約55,000円）である。

その他、健康体操のプログラムには、60名の方が参加している。

また、「心臓のスポーツ」という心臓疾患のリハビリを兼ねたプログラムを実施しているが、これはドイツでも心臓疾患の増加は深刻で、心臓疾

コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブの建物入口

理事の方々

患を抱えた人のためにリハビリや運動を行い治療の一環とするものである。病気の発症からリハビリ・退院後、プログラムを開始する。このプログラムでは必ず医師の付き添いを義務付け、指導者には謝金を出している。毎週２回開催し、126名の会員が参加している。

「脳のスポーツ」という老化を抑えるプログラムは、月曜日に90分間、全10回で実施し、毎回15名程度の参加があり、７年間継続している。

その他、水泳（水温31度の温水プール使用）や気功、ケーゲル（ドイツボウリング）、ノルディックウォーキング、自転車、バレーボール、月１回のオペラ見学等の活動を行っている。

クラブハウスでの説明の様子

質疑応答

質問	回答
会員数は何人か？	810名、20程度のプログラムに参加
地域の高齢者の参加者はどれぐらいか？	地域の33%程度の高齢者が参加
なぜ設立時点から50歳以上をターゲットにしたか？	1978年当時には高齢者を対象としたクラブがなく、必要だと思ったため 今後このようなクラブは増えると思われる
近くに同じような高齢者を対象としたクラブはあるか？	同様の年代を対象としたクラブは州内に40 ～ 50ある
会員の交通手段はどのようなものか？	公共のバス、自転車等 遠方で15km程度の範囲から通う会員がいる
プログラムの会費はどの程度か？	ヨガ、気功、ダンスは別途料金がかかるが高いもので7ユーロ／月（約700円）程度
会員は保険には加入しているのか？	会費に含まれている
理事の交代はどのように行うのか？	2年に1回会員総会にて選出される
理事の平均年齢と男女比率はどの程度か？	理事は平均69歳、男性1/3、女性2/3
バス旅行の際、健康チェックは行うか？	行わない（健康な方が参加する前提）
12日間の旅行が550ユーロで可能なのか？	ホテルは1泊45ユーロ位を貸し切ることで値切り40ユーロ程度とする スタッフはボランティアとする
心臓スポーツのプログラムを実施する上で、心配は無いか？	プログラムに医師の付き添いを行っているため、特に心配はしていない

このクラブハウスはもともと銀行だったところを安く買い上げ、内装改築を会員自ら工事したと、技術担当のノエンドル理事が自慢そうに答えられた。

ケーゲルと夕食懇親会

理事の方々と夕食懇親会とともにケーゲル（ドイツボウリング）を行った。ケーゲルとは、ボウリングに似たような、指穴の開いていない小さめのボールで９本のピンを倒す競技である。実力重視ではなく色々なゲーム方法があり、飲食をしながら楽しめるスポーツで、大変盛り上がった。

【報告：北倉 利治】

ケーゲル場

クラブ視察 ②

TUSグレーヴェンブロイヒ

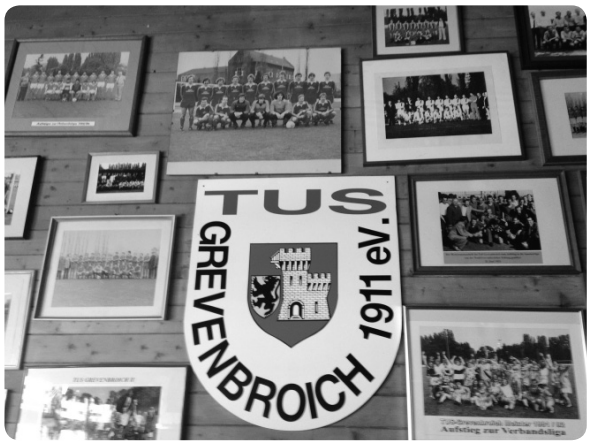
－サッカー部門訪問－
－ユース育成のコンセプト－

クラブの概要

TUSグレーヴェンブロイヒには、サッカー、ハンドボール、ビリヤード、バレーボール、テニス、バドミントン、体操、心臓スポーツ（心臓疾患を抱えた人向けのトレーニングプログラム）の部門があり、約1,200名の会員が活動している。クラブ全体の組織だけではなく、各部門にそれぞれの組織があり各部長がそれぞれの部門をまとめている。

クラブ名の“TUS（Turn-und Sportverein)”はドイツ語で体操とスポーツの頭文字となっており、クラブの哲学としては、「市民スポーツと競技スポーツ、若者から老人まで」を掲げている。

また、クラブのシンボルマークは市の紋章（城とライオンがモチーフ）の周りに「クラブ名＋設立年度（1911年)」が描かれている。



クラブのエンブレムと歴史ある写真

TUSグレーヴェンブロイヒでの実施種目

歴史

1911年：サッカーに魅了された人々によって設立
　　設立当初はFC グレーヴェンブロイヒという名前で活動

1925年：専用のサッカーグラウンドが完成

1928年：アムステルダムオリンピックにクラブから選手を輩出

1950年代～ 60年代：サッカー部門が国内上位リー

100年誌

グに昇格し活躍
2011年：クラブ創設100周年（記念のサッカー大会などを開催）

施設

市所有のスポーツ施設（観客席付きサッカースタジアム、トレーニンググラウンド×２面、陸上トラック、体育館）を利用しているが、クラブに使用の優先権があり、サッカー場の隣にはクラブ所有のクラブハウスがある。また、市が近隣にもう１面人工芝のグラウンドを建設する予定があり、そこも借用する予定である。

サッカー部門について

クラブのサッカー部門には、５つの大人のチーム（内１チームは女子）と13のユースチームがあり、クラブのチームカラーは赤となっている。前記の施設を活用して各チームが活動しているが、現状ではクラブ内にある全てのチームが望む時間に活動場所を提供することは難しく、市による新たな人工芝グラウンドの建設は大変ありがたいと思っている。

サッカー部門の役員としては、サッカー部門全体の会長と会計の他に、シニア部門の代表、事務局（ゲーム運営、審判の派遣を担当）、スポーツディレクター（チーム管理）、会計、お世話係（洗濯などの雑務）、女子チームの担当者、35名のユースチームの指導者・世話人がいる。それらの役員には税理士や銀行員、公務員など地域の様々な人々がボランティアで関わっている。また、監督やコーチも基本的にはボランティアで指導を行っており、クラブからは交通費程度の支払いしか行っていない。なお、会長などの役員については会員の中から選挙で選出している。

トップチーム（現在ブンデスリーガの下部リーグ５部所属）の選手たちは、子どもたちの憧れでもあり、ユースチームの子どもたちはトップチームでプレーすることを目標としている。また、ホームでの試合には、スタジアムにスポンサーの広告を出すなどしており、その様な活動がスポンサーに対してのアピール材料にもなっている。

ユース育成について

クラブには13のユースチームがあり、５歳以上から公式戦に出場することが出来る。年齢別のカテゴリー毎にチームがあるが、学校の全日制の問題（帰宅後は疲れてそこからサッカーをする気力が湧かない等）などもあり、特に年少カテゴリーの会員は減少している。クラブとしては、学校に出向いてスポーツの機会を提供するなどして、少しでもスポーツに興味を持ってもらう工夫や子どもたちのクラブ活動への参加に対する動機づけなどを行っている。

また、ユースチームを運営していくには、多くの指導者と用具が必要となり、ユースチームのトレーニング用具、ユニフォーム、指導者に関わる費用（交通費のみ）だけでも年間8,500ユーロ（内ボール代だけで3,000ユーロ）の支出があり、会

クラブ説明（クラブハウスのテラスにて）

観客席のある天然芝のサッカー場と陸上トラック

費（6ユーロ／月）の他に、寄付金、大会などでの飲食物などの売り上げを収入に充てている。

なお、ユースチームの運営以外にも2006年からは他のサッカークラブと協力して学校が休みの期間にサッカースクールを開催しており、約120名の参加者がある。そこでは、サッカーの技術力向上だけではなく友達づくりも目的としており、参加者にはTシャツやボールをお土産として渡している。また、スクール開催時の昼食はスポンサーに提供していただいている。

他にも、1.FCケルンなどの有名チームとパートナーシップ契約を結んでおり、クラブが主催する大会に有名チームのユースが参加することで、他のクラブからも多くの参加がある。

ユース年代育成の実績のひとつとしては、フォルトゥナ・デュッセルドルフ（ブンデスリーガ1部）の現在のキャプテンがこのクラブの出身選手である。

クラブのパートナーについて

クラブの一番のパートナーは市であり、市がスポーツ施設の整備、管理などを行っている。また、企業（ユニフォームやTシャツのメーカーなど）にも格安で用具を提供いただくなど、パートナーの協力を得ながらクラブでスポーツをする環境が整備されている。

TUS GREVENBROICH

HP：http://www.tusgv.de
Facebook：
http://www.facebook.com/TusGrevenbroich1911

【報告：伊藤 啓太】

クラブハウス外観

クラブハウス内のカウンター

トロフィーやペナントで装飾されたクラブハウス内

クラブ視察③

オルケン体操クラブ

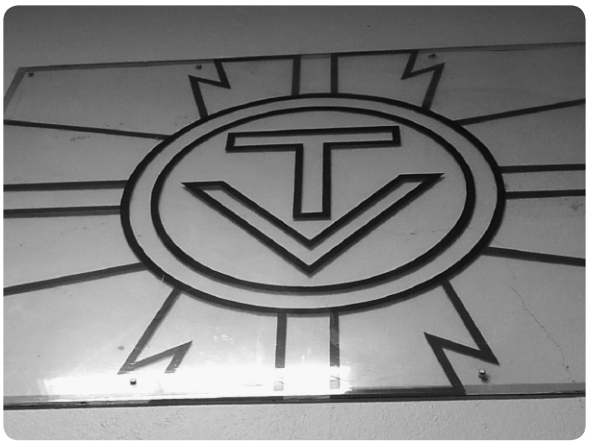
－クラブ施設について－
－理事との懇親－

はじめに

オルケン体操クラブは、1896年（明治29年）に設立された。（ドイツ帝国成立は明治４年）今回視察したクラブの中では最も早い設立である。会員数は約900名。1961年には小体育館、1991年には大体育館が改築された。改築・補修費用はクラブ会費で賄われており、大体育館の改築時は床・壁などの作製など会員自らの手で行った。施設の多くは、クラブが所有し、整備・管理も行っている。

会費は月大人7.7ユーロ（約770円）、18才以下は月4.4ユーロ（約440円）。指導者の謝金については、クラブ出身のコーチのため、交通費程度の１回５～10ユーロ（約500～1,000円程度）である。

設立当初は体操クラブ（ただし、当時の「体操」とは投てき・水泳も含まれるなど広い概念であった）として出発したが、現在は体操、サッカー、バレーボール、卓球、柔術などの格闘技、射撃など、様々な生涯スポーツが楽しめるクラブとして活動している。



クラブのロゴマーク

クラブハウス内

クラブ施設

施設はスポーツの活動の場、コミュニケーションの場、活動後の憩いの場、会議、教育の場として使用されている。施設には管理人がいないため、それぞれの鍵は各グループの代表者、指導者が管理し、会員の自主管理の元に置かれている。午後３時から10時まで会員が利用している。

地域の学校も利用することもある。

①大体育館

さまざまな活動の中心施設。特に女子の体操はこの地域（グレーヴェンブロイヒ）では非常にレベルが高く、クラブ出身のコーチの指導を受けトレーニングに励んでいる。

②小体育館

畳を敷き、格闘系スポーツのトレーニングの場として利用されている。格闘系スポーツの会員は約80名おり、視察当日も柔術のトレーニングが熱心に行われていた。

③舞台施設

大体育館と小体育館の間に上下（約80cm）可動させることができる床（学校体育館のステージぐらいのスペースがある）があり、舞台としてコンサート等に利用できる空間になっている。これも会員の手で造られたそう

だ。これにより同時間に３つの違う競技の練習を行うこともできる。

④トレーニングルーム

昔は運動後の憩いの場（ビアホール）として使われていたが、現在ではフィットネス器具、自転車など各種多数揃えられており、愛好者からアスリートまで幅広く使用している。

また、週２回トレーニングをしているグループもある。

⑤屋外施設（人工芝のサッカーグラウンド等）

人工芝のサッカーグラウンドは市が所有し、オルケン地区のアマチュアサッカーの16チーム（シニア～ジュニア、女子等）が練習や試合で利用し、楽しんでいる。視察当日も子どもたちが練習していた。人工芝を持っていないプロのチームも冬場になるとここでトレーニングを行うことがある。年１度人工芝の手入れが必要であるが、その経費は天然芝に比べ半分以下（年間５万～８万ユーロ）であり、行政（市）が負担している。またグラウンドは、サッカー以外のスポーツにも使用されている。外側には全天候型の陸上用トラック（100m）もある。

他にもビーチバレーボールコートが２面、バーベキュー施設などがある。

⑥クラブハウス

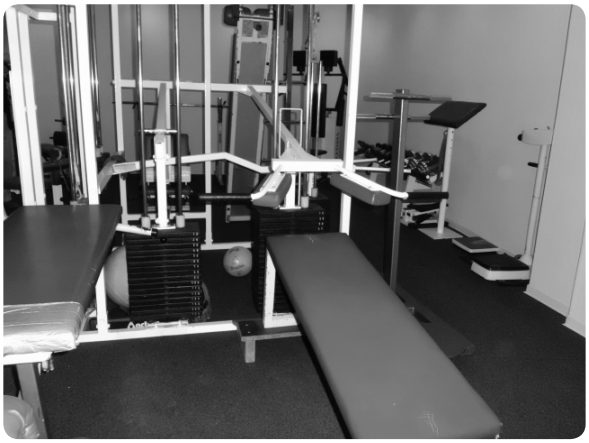
会合や会議の場、コミュニケーションの場、活動後の憩いの場として利用されている。ビールサーバーが備えられたカウンターがあり、会員の利用の際に供される。料金はビール90ユーロ・セント、コーラ、ジュースは70ユーロ・セント支払う。食べ物はそれぞれの会員持ち込みで賄われている。

大体育館

小体育館での活動風景（柔術）

舞台装置のある部屋

体操競技の器具



トレーニングルーム

人工芝のサッカー場

理事の方々との懇親会

夜の帳も降り、オルケン体操クラブの理事の方々が暖かく私たちを歓迎してくれた。

場所はビールサーバーが設えられたクラブハウス。「KANPAI」の発声で始まった懇親会では、サプライズでクラブ所属のブラスバンドの演奏を披露していただき、非常に感動した。お礼にと、その場にいた全員で頭に豆絞り鉢巻き装束で鹿児島の伝統踊り「おはら節」を踊り、楽しい夜を過ごした。

クラブハウスのカウンター

【報告：鈴木 元子】

クラブ視察 ④

TSV バイヤードルマーゲン

－仕事への適正－
－ビジネスのためのクラブサービス－

クラブ概要

広大な化学工場団地の中に広大な敷地と各種の自前施設を有するビッグクラブである。製薬会社であるバイヤー社から様々な面で大きな支援を受けて運営されている。

1920年にバイヤー社の従業員のスポーツ活動を支援するために創立された。このクラブの前身として、体操、サッカーの２つのクラブがあり、その頃から企業から大きな支援を受けていたが、企業の決定により２つのクラブが合併し現在の形になった。バイヤー社の従業員にとっては大変便利な施設であり、仕事の合間や勤務後に利用されている。もちろん従業員以外にも利用されており、現在の会員数は約5,000名、専任職員100名を雇用している。講師のヴェルツ氏によれば、中小企業程度の規模と考え経営にあたっているとのこと。

設立当初から現在のような大きなクラブだったわけではなく、年月を重ねる中で施設数や会員数が増えてきた。施設も必要に応じて増えてきており、最も古い建物は1950年代に建てられたもので、現在は事務所として使用されている。次にフェンシングの体育館、その次に80年代にもう１つ、さらに近年新しいセンターが建てられた。現在利用している建物、スポーツ施設は全てクラブの所有となっている。

重点は競技スポーツにあり、水泳、陸上、フェンシング、ハンドボールの４種目においては、州及びラインランド地方（デュッセルドルフ～マインツ周辺）を代表する強化拠点施設（オリンピックレベル）になっている。また、一方で生涯スポーツ、健康志向でクラブを利用する会員にも広く利用されている。

クラブ運営においては様々な変化が起こっている。ヴェルツ氏が働き始めたころは、運営資金の96％がバイヤー社によって支払われていたが、現在では大幅にその割合が下がっている。そのため、フィットネススタジオを開設したり、イベントを行ったりと新たな事業展開により収益をあげる努力をしているとのことだった。

施設見学

①屋外温水プール（50m）

- 年中無休で利用できる。当日は学校の秋休み期間ということもあり、子ども達の強化練

クラブのシンボル

事務所

習が行われていた他、一般の利用者も水中ウォーキングをしたり、自由に泳いだりして体を動かしていた。

- 年中無休で利用できる50mプールは近隣には他にあまりない。
- 競技力育成に大きな役割を果たしており、このプールからロンドンオリンピック参加選手も輩出した。
- トップアスリートだけでなく子どもたちの水泳教室も開いており、今後の選手発掘も考えている。
- 会員のうち650名がプールを利用している。
- 当初はバイヤー社がゴミを燃やすエネルギーを無料で再利用することができていたが、現在は全ての費用がクラブ負担になっており、相当な水光熱費がかかっている。
- そのため、現在ドルマーゲン市に対して、維持管理費用の一部を負担してもらえないか要求しているが、まだ合意に至っていない。このことに関して、2012年11月25日に市民に判断してもらうための直接投票が行われる。市民あるいは市からの同意が得られなければ施設の閉鎖も考えている。
- しかし仮にこのプールが閉鎖すると、市はこれまでのような水泳の強化、普及の機会提供を別の形で行わなければならないことになる。また、クラブとしてはすでに市民から同意を得るためのキャンペーンを張り、8,000名以上の市民からの署名を得ている。
- ただし、ドルマーゲン市の財政も厳しい。現在選挙期間でもあり、行政としてどうしていくべきかという考えが定まらず検討が続いている。
- プールを維持する工夫として企業の水泳大会にプールを貸して使用料を取ることもしているが、大きな財源にはなっていない。

（※後日の市民による直接投票の結果、90%以上がプールを維持することに賛成し、その費用の一部をドルマーゲン市が負担することになった）

②フェンシング専用体育館

- フェンシングは選手２人に対して１人のコーチの体制。全国レベルのコーチ５人が常勤でジュニアトレーニングを担当し、次世代を担う選手を育成している。
- 世界チャンピオンを輩出し、その選手を育てたコーチは現在もクラブに所属している。
- ジュニアの世界選手権もこの施設で開催したことがある。
- 学校と密接な連携をしている。

③フィットネススタジオ

- 330㎡程の部屋を使用し、１日４～５本のプログラムを実施。
- 視察当日はステップ台を利用したエアロビクスが行われており、15名程の男女が参加していた。

温水プール

フェンシング専用体育館

園内の遊び場

屋内陸上トレーニング施設

④園内の遊び場

- 家族で利用できるクラブというところにも重点を置いており、施設の敷地内に公園や子どもが遊べる遊具が設置してあった。
- 14才までの子どもたちの会員数は2,500名である。

⑤室内陸上トレーニング場

- 全天候型トラック（直線）があり、幅跳び、高跳び、投てき種目など各種目のトレーニングが実施可能。
- 屋外にも陸上フィールドがあるが、外でトレーニングできない時期のために室内練習場がある。
- 棒高跳びに力を入れている。そのために必要な体操種目のトレーニングを取り入れ、用具も充実している。
- 投てき種目用のゾーンは事故防止のためネットで囲われていた。
- このトレーニング場からロンドンオリンピック出場選手も輩出した。
- ヴェルツ氏自身も選手の頃はここでトレーニングし、幅跳びではドイツ選手権でも優勝した実力の持ち主であった。

⑥BBQ場、キッチン

- スポーツには祝い事がつきものなので、屋外BBQのスペースやキッチンが設けられている。
- 会員は自由に利用することができる。

⑦室内練習場

- スプリント種目（60m走）、ハードルができるようになっている。
- 天井設置のカーテン式仕切り壁によって３ヶ所に区切って使用することができる。
- 視察当日は子どもを対象とした運動プログラムが実施されていた。
- ヴェルツ氏から紹介された話として、クラブではかつてバイヤー社の社会貢献事業として委託を受け、社会的な課題のある家族（低所得者層など）の子どもを受け入れ、トレーニングの機会や食事を提供していた。そういった層の幼い子どもたちを世話する中で能力の高い子どもを発掘する、あらゆる層の子どもにスポーツへの参加機会を提供する、様々なバックグラウンドをもつ子ども同士が交流する機会を提供する、といったことを目的としていたとのことであった。

室内練習場で活動する子供たち

※当日は見学できなかったが、柔道場やマシンのあるトレーニングルームもある。陸上・サッカー場やビーチバレーコート、テニスコート、レストラン等も併設している。

陸上・サッカー場

⑧センター（2001年完成）

- 2,600名が収容できる観客席の付いた体育館（ハンドボールが主に使用）で、音楽イベント、コンサートでも使用。
- その他小さなレッスン（視察当日は子どものバレエ教室を実施）が出来る部屋が複数設置されている。
- 託児所も併設している。（実際に小さい子が預けられていた。）
- 建設費用が1,200万ユーロ（約12億円）かかったが、バイヤー社、ドルマーゲン市、各スポーツクラブやスポンサーから支援があった。（トヨタもスポンサーのひとつである）
- 学校のスポーツの授業でも使われている。
- その２階に設置された喫茶コーナーにて、講義を実施した。

ビーチバレーコート

センター（主にハンドボールで使用）

クラブ内レストラン

案内して下さったアクセル・ヴェルツ氏

講義：企業に対する健康プログラムの企画・提供

講師：アクセル・ヴェルツ氏

クラブでは、バイヤー社に対しての健康プログラムの企画・提供をしている。

その背景にはドイツでの高齢化がある。かつては55才で定年だったが現在は67才まで働くことになり、労働者の高齢化に伴って、病気やケガなどの疾病のリスク増加が懸念される。高齢の労働者が病気やケガをすると長期の業務離脱（１週間程度）に繋がりかねない。定年である67才まで働き続けるためには健康な労働者であることと同時に、それを支える適切なトレーニングが必要になる。

そこで、クラブはバイヤー社の社員に対し、トップアスリート育成の中で培った、動作解析、精神状態把握、リスクマネジメントなどの様々な専門性を駆使してメディカルチェックを行い、各人の健康状態や知識スキルを診断・分析し、それに対しての指導を行っている。

具体的な例として、25kgの荷物を持ち上げる際にどのように持ち上げれば体に負荷が最も少なく、腰痛などのリスクを回避して作業を効率的に行えるかなどを、動作解析ソフトを使ってチェックし、必要に応じて講習会などを開催し労働者に対しての助言を行っていることや、過剰な負荷が発生する作業工程に対しては、機械やロボットの導入を促すなどの助言も行っている。

労働者自身はその作業によって、体のどこの部位にどの程度負荷がかかるかを知る機会はあまりない。また、若いうちは大丈夫でも加齢に伴うリスクについての正しい知識を持ち合わせることも難しいため、こういったプログラムの導入は非常に効果的であると言える。作業用車両への乗り方などにおいても、正しい乗り方をしないことで半月板に負荷がかかることもあるため、正しい体の動かし方をレクチャーしている。

現在バイヤー社には社員が21,000名おり、それに対してメディカルチェック（体力測定等を含む）のサービスをしている。これらのプログラムには予防医学の視点も踏まえ、医療関係者ともネットワークを組んでプログラムを実施している。１人の労働者が１日休むと600ユーロ（約６万円）の損失があると言われているが、このプログラムを利用することで、１人に対して４～５ユーロ（約500円程度）のコストでこの損失を回避することが出来る。ある保険会社によると、2011年から2012年にかけてこのプログラムを受けたことで、病気やケガになる確率が4.5％減ったとされており、１％につき１億円相当の効果があると言われた。こういったプログラムで従業員を健康にすることは企業の損失を減らし、大きな経済的効果を生み出す可能性があると他の企業からも注目されている。

クラブとしては、会社の幹部・経営者に対してこの効果を訴えている。また、アドバイスの中で運動が必要だとされた人に対しては、トレーニングの一環として自クラブを利用することを提案している。

これまでのように、単なるスポンサーとして企業がクラブに対して資金援助することは難しくなってきているため、このようにクラブが持つノウハウや技術を企業に提供することで、企業から資金を得ていく取り組みが今後ますます必要であると考えている。

こういったプログラムで得た収益を学校との連携や選手育成に活用することで、資金の循環も生まれている。

【報告：西村 貴之】

2012年10月19日(金)　14：00～16：00

クラブ視察 5

BV ヴェックホーフェン

講師

- トーマス・ラング氏（BVヴェックホーフェン理事長、ライン･ノイス郡スポーツ連盟理事長）
- ビーネフ氏（ライン・ノイス郡スポーツ連盟副理事長／指導者の養成等に携わる）

※２年前に福島県の子どもたちを招いた際にゲームの指導者として活躍された。

この地区に根ざしたクラブについて（BVヴェックホーフェン）

１．クラブについて

ノイス市は人口約15万人。デュッセルドルフのような大都市にも近い事から、外国人の移民が近年増加している。この地区には17カ国出身の住民がいる。

各地区には市が１つスポーツ施設を整備。その施設をクラブが市から無料で借り受けている。光熱費やサッカー場等を整備する人件費も市が負担している。ノイス市以外では施設料を支払っている所もあり、近い将来にはノイス市でも施設料を支払う必要が出てくる可能性もある。

法律で非営利法人が優遇される仕組みがある。（日本で例えるならNPOを優遇）

・市からの借用施設

体育館：３、サッカー場：１、クラブハウス：１

２．組織について

BVヴェックホーフェンは1927年設立。サッカークラブからスタートし、このクラブは完全にボランティアで運営されている。例えば、試合に掛かった選手の交通費等諸費用は全て選手の自己負担が基本とされており、そのことで他のクラブに選手を引き抜かれるケースもある。（近隣のクラ

クラブハウス

天然芝のサッカー場

カウンタースペース

25年ごとに作成するクラブのエンブレム

クラブのグッズ

ブでは諸費用をクラブが持ち自己負担が無い所もある）企業からは寄付等の支援を受けていない。

• クラブの総会　１回/ １年

年会費の値上げ等の場合には、会員の合意で総会決議される（日本と同じ仕組み）

（会費設定）

大　人：72ユーロ/年（約7,200円）

子ども：48ユーロ/年（約4,800円）

会費はクラブ運営費に充てている。その他の収入としては、サッカーの試合や大会等を開催した際にバーベキュー(飲食販売)や、その他販売品で収益を上げ､クラブ運営費に充てている。

• 各部門：８部門で組織構成されている

事務管理・事務局長・経理担当・青少年育成
→事務局（日本の組織形態と同様）

（８部門）

・バドミントン　・卓球　・サッカー

・アメリカンフットボール　・空手

・自転車（長距離）

・バレーボール

※郡のレベルで試合を行っている

・生涯スポーツ（コースを提供）

※税金・傷害保険等の諸経費を除いた残りの会費は８つの部門へ全て分配し、各部門に責任を持たせ運営を任せている。どの様に使用するのかは原則事務局は関与しない。

【質疑応答】

質問	回答
新しく会員になりたい方には、クラブの説明は会長がするか？	インターネットで事前に確認してもらい、部門の指導者が対応する
このクラブの会費の設定は一般的なドイツのクラブと比較して、高いのか安いのか？	平均であると思われる
クラブへの入会金の制度はあるのか？	入会金の設定はない
年度途中からクラブへ入会した場合、年会費は100%支払うのか？	年会費の月割を行い、１/４の徴収等で対応している

３．今後のクラブの課題

近年導入されつつある学校の全日制の為、クラブの運営が難しくなってきており、このクラブも例外ではない。学校が終わり16時以降に子供達がこのクラブにやって来る形になるが、そこで１つの対策として、学校と連携し指導者派遣を開始した。現在、午後の活動（14時～ 16時）のために、学校にサッカーや卓球の指導者を派遣している。

クラブハウス天井の装飾

午後の活動はスポーツだけではなく、文化的な活動や宿題等の世話も行うこともある。指導者派遣を実施することにより報酬がクラブに入り、大半は指導者への謝金となるがクラブの収入にも繋がる。

学校側と上手く連携を取り、また多くの子どもがクラブに携わるように工夫が必要であると考えている。

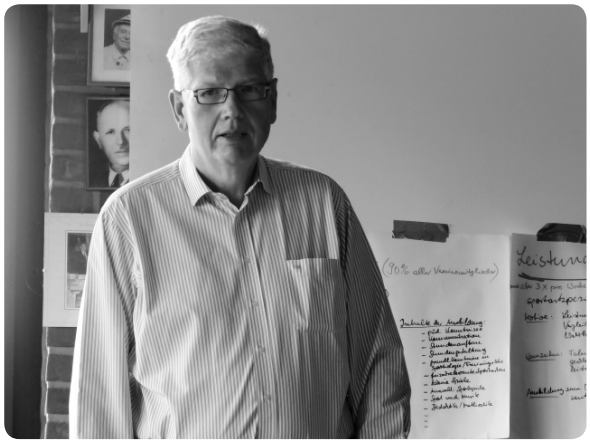
ライン・ノイス郡のスポーツ連盟について

トーマス・ラング氏は、BVヴェックホーフェンの理事長とともに、ライン・ノイス郡のスポーツ連盟の会長を10年務めている。

ライン・ノイス郡には８市町があり、その中に多くのクラブがある。郡スポーツ連盟としては、青少年のために活動してもらえる人々を獲得しようと努力している。各クラブに対し、郡や国内の青少年のために何か活動をしてもらえないか相談したり、同年代の青少年にも働きかけたりしている。２年前に福島の子供達を受け入れた際も、その人々に協力してもらった。

今年（2012年）のロンドンオリンピックの際にも、希望者を募りロンドンに派遣した。240人が集まり、ロンドンに拠点を設け10日間滞在し、参加選手達と交流を深めたり試合の応援や見学等を行ったりした。

ライン・ノイス郡には、大小様々な規模合わせて約370のクラブがある。最も大きいクラブは約6,000人規模の会員数、最も小さい規模は「つりクラブ」の20人以下である。



トーマス・ラング理事長

郡のスポーツ連盟の傘下にクラブが入る理由は、連盟として政界に対し活動の内容を伝えたり、支援を求めたりする等の幅広い活動を行っているからである。また、ライン・ノイス郡では、青少年コースの指導者への支援として、全体で27万ユーロ（約2,700万円）を各クラブに分配している。その他、安全保険の対象は郡スポーツ連盟への加入が条件であったり、各クラブにオリンピック級の選手がいる場合には支援を行ったりもする。

また、郡スポーツ連盟としての重要な活動に、様々なコースの指導者養成がある。このライン・ノイス郡では、年間200回以上の講習会等を主催している。

【報告：表田 実典】